



亀山八幡神社御弓神事が開催 三原市無形民俗文化財

11日、向田の亀山八幡神社で初祈禱祭が行われ、その後、御弓神事が行われました。御弓神事は恵方の方角と反対側に的を立て、竹で作った弓と矢を用い、その年の魔を打ち払うという意味で参拝者が矢を放ち、家内安全・無病息災・五穀豊穡を祈願します。

山田宮司・日本旧道連盟教師で向田出身の田中ひとみさん(三原市教育委員)に続いて総代、区役員、還暦、頭屋の人たちが的に向けて矢を放ちました。

御弓神事は市無形民俗文化財に指定されています。



さぎしまを愛するボランティアガイドが先月、県立広島大学でのシンポジウムと県社会福祉協議会のボランティア交流サミットに参加、高い評価を受けました。

2月11日に県立大三原キャンパス大講義室で行われたシンポジウム「瀬戸の島々での海浜セラピーの実践〜癒やし(医やし)・健康・おもてなし」は、地域貢献を目的とした同大重点研究事業「学長プロジェクト」のひとつで約120人が集まりました。

ストレスが多い現代社会で、五感で海や浜を感じ、島ならではの食を味わい、心身を開放する「海浜セラピー」。同大の大塚彰教授とさぎしまを愛するボランティアガイドがメニューを考案、実証実験で効果が明らかになり、観光資源としても注目されます。

さぎしまを愛するボランティアガイド

海浜セラピーの成果を発表



ボランティアガイドからは6人が登壇、5人が応援に駆け付け、午前中は、経過をプレゼンテーション、午後には花づくりなど地域活動に取り組む人とのシンポジウムで実践報告を行いました。

つながりたい団体、第1位に ボランティア交流サミット

またボランティアガイドは14日に広島市、県社会福祉会館で開催された「ボランティア交流サミットひろしま2014」にも参加しました。

今年で3回目になるこのサミットには、実行委員会の推薦を受けた12の団体が集まり、ブースなどで活動を紹介、250人が訪れました。

このサミットはボランティア団体が横につながることを目的で、ボランティアガイドは、投票でつながりたい団体の第1位に選ばれました。県社協地域福祉課の阿村さんは「自分たちの住んでいる島を愛していることが伝わり、美化活動などで島を訪ねたい」という声が多く出た。また次回も」と話しています。

宮本常一と佐木島

(2) 風景はかわる



昭和40(1965)年に民俗学者の宮本常一は、日本の各地を紹介したドキュメンタリー番組「日本の詩情」を企画監修しています。その番組の冒頭に次の3行が現れたそうです。

自然は寂しい／しかし人の手が加わると暖かくなる／その暖かなものを求めて歩いてみよう

自然が豊かだ、緑が美しい、わたしなどは風景に出会い、単純にそう思ってしまう。しかし、宮本常一は、そこに人の手を見出していました。

その人の手の加わった自然の美しさ、暖かさの意味を、宮本常一は「風景はかわる」という一文の中で、特に佐木島の歴史を例にあげて記しています(昭和54年(1979年)、財団法人土井林学振興会刊行、「森林」一内所収)。

話は昭和の初めにさかのぼります。もともと島は大きな木でおおわれていたという話を古老から聞いた、当時の村長は、「ほとんど木らしい木がなく、月が照っても早魘になると言われた島を、もう一度木の茂る島にしたいと考え、まず持ち山に治山によく用いられたハゲシバリを植えたそうです。

ハゲシバリは成長し、その谷にはささやかな泉が湧くようになった。それから次第に山にハゲシバリが植えられ、その下の畑には蜜柑が植えられた。そしていま島は青々としており、家のまわりの畑は野菜の栽培が盛んになっている。いかにも落ちついた美しい島である。

いま様々な柑橘が植えられ、海浜も大事にされています。春には塔の峰千本桜も咲き誇ります。景物だけでなく史跡や建物、新たな風景は生み出されているのです。宮本常一は続けます。

それが人々に寄与し、その生活と心を豊かにする。自然の荒廃はまた心の荒廃を意味する

自然を風景と読んでもいいでしょう。「土性骨のすわった人たち」とこの「風景をかえている人の手」が重なります。(つづく)